ISSN 2189-4787

浦幌町立博物館

紀要

第16号

『浦幌町郷土博物館報告』創刊号～第45号
（1972～1996）継続

BULLETIN OF THE HISTORICAL MUSEUM OF URAHORO

目　　次

荒　川　和　子：浦幌町立博物館所蔵の2015年度採集の蝶標本 …… 1
円　子　紳　一：浦幌で初めてのウチダザリガニ駆除 …… 9
持田　誠・加藤ゆき恵：カブスゲ*Carex cespitosa* L.のヤチボウズ断面 …… 15
武藤満雄・持田　誠：十勝川で確認されたアライグマ*Procyon lotor* Linnaeus …… 19
持　田　　誠：浦幌で回収したアオジ*Emberiza spodocephala* Pallasの標識個体 …… 21
三浦直春　解読：〔資料紹介〕大正十五年・昭和元年　教育雑件　浦幌村役場 …… 24

2016
3

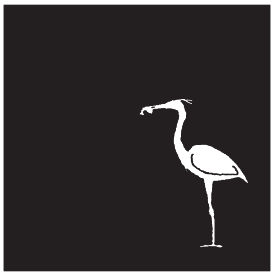
北　海　道
浦　幌　町　立　博　物　館

ISSN 2189-4787

浦幌町立博物館

紀要

第16号



『浦幌町郷土博物館報告』創刊号～第45号
（1972～1996）継続

BULLETIN OF THE HISTORICAL MUSEUM OF URAHORO

2016
3

北海道
浦幌町立博物館

序

浦幌町立浦幌博物館の調査研究活動の成果と、常日頃から本館の活動に何かとご指導ご協力をいただいている方々の報文、論文、解読などを取りまとめ、皆様方にお届けすることとなりました。

さて、地域における博物館を取り巻く環境は依然として厳しいものがありますが、博物館はその存在理由を明確に地域社会に示すとともに、時代の流れや地域課題に沿った活動が求められてきております。

このような状況の中で、博物館としての理念や目的を今一度真剣になって問い直すことが必要になってきており、博物館事業の根幹をなす調査研究や地域に密着した博物館をどのようにして継続していくかが大きな課題となっています。

本町では、「うらほろスタイルを創出する教育・文化のまち」づくりを基本目標として掲げ、町民協働による特色ある教育行政を進めております。

ふるさとを愛し、未来を切り拓く逞しい子どもたちの育成を目指して、義務教育９年間を見通した連続性と一貫性のある指導を行うとともに、地域総ぐるみによる教育支援を進めていくため、本年度より「小中一貫コミュニティ・スクール」を本格的に導入いたしました。その中で、生涯学習施設である博物館の人づくりまちづくりに果たす役割は今後も益々大きくなってまいります。

その活動に一部であるこの紀要は、広く論文や報告を収録するために創刊されたもので、1972年に創刊された「浦幌町郷土博物館報告」を起源として現在まで半世紀に亘り毎年発刊されております。第16号からは新たに国際標準逐次刊行物番号（ISSN）を取得し、学術定期刊行物としての体裁を整えました。今後も博物館資料の調査研究に限らず、幅広い編集を目指して参りたいと考えております。

結びになりますが、「紀要」発刊にあたり平素より本館の管理運営に格別のご指導・ご協力を賜っています多くの皆様方に、深甚なる敬意と感謝を申し上げごあいさつといたします。

2016年３月

浦幌町立博物館長　高　橋　　慎

浦幌町立博物館所蔵の 2015 年度採集の蝶標本

荒川 和子 *

Kazuko Arakawa, 2016. Butterfly 2015 collection of The Hisotorical Museum of Urahoro.
Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 16: 1-7.

整理番号	受入番号	点数	計測値	採集地	採集年月日	採集者
アゲハチョウ科　Papilionidae						
ミヤマカラスアゲハ　*Papilio maackii* MENETRIES						
1226	2016- 11	2	101	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.6. 8	荒川和子
シロチョウ科　Pieridac						
モンキチョウ　*Colias (Colias) erate* ESPER						
1227	2016- 1	5	40～45	北海道十勝郡浦幌町万年	2015.7.20	荒川和子
1228	2016- 2	1	42	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.7.20	荒川和子
1229	2016- 3	1	38	北海道十勝郡浦幌町留真	2015.9.16	荒川和子
1230	2016- 66	1	51	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.7.30	石原靖大
1231	2016- 67	1	42	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.7.30	山北つばさ
エゾスジグロシロチョウ　*Pieris (Artogeia) napi* LINNAEUS						
1232	2016- 4	1	49	北海道十勝郡浦幌町東山	2015.7.12	荒川和子
1233	2016- 5	2	44～49	北海道十勝郡浦幌町常豊	2015.7.19	荒川和子
1234	2016- 6	1	49	北海道十勝郡浦幌町南町	2015.7.20	荒川和子
1235	2016- 7	1	50	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.8. 2	荒川和子
1236	2016- 8	2	50～52	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.9.16	荒川和子
1238	2016- 62	2	52	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.8.23	荒川和子
エゾヒメシロチョウ（♂）　*Leptidea morsei* FENTON						
1239	2016- 9	1	41	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.7.19	荒川和子
1240	2016- 10	3	36～41	北海道十勝郡浦幌町万年	2015.7.23	荒川和子
1241	2016- 68	1	46	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.7.30	山北つばさ
セセリチョウ科　Hesperiidae						
オオチャバネセセリ　*Polytremis pellucida* MURRAY						
1242	2016- 18	2	32～35	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.6. 8	荒川和子
1243	2016- 12	1	34	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.7.19	荒川和子
1244	2016- 13	1	31	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.8. 2	荒川和子
チャマダラセセリ　*Polytremis pellucida* MURRAY						
1245	2016- 14	1	32～35	北海道十勝郡浦幌町東山	2015.8. 2	荒川和子
コキマダラセセリ　*Ochlodes venata* BREMER＆GREY						
1246	2016- 15	1	33	北海道十勝郡浦幌町常豊	2015. 7.9	荒川和子
1247	2016- 16	1	33	北海道十勝郡浦幌町万年	2015.7.20	荒川和子
1248	2016- 17	1	30	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.7.20	荒川和子
タテハチョウ科　Nymphalidac						
ウラギンヒョウモン　*Fabriciana adippe* LINNAEUS						

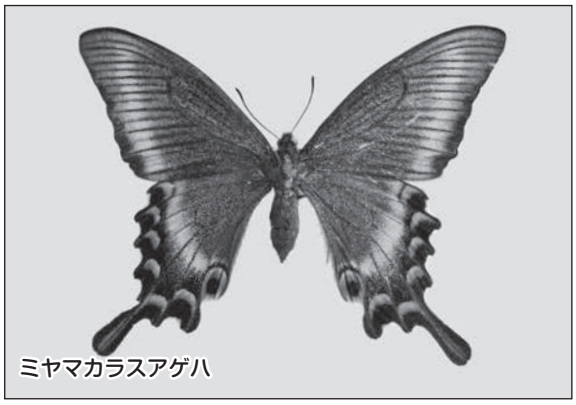
* 〒089-5617　北海道十勝郡浦幌町字南町

整理番号	受入番号	点数	計測値	採集地	採集年月日	採集者
1249	2016- 19	2	57	北海道十勝郡浦幌町平和塔	2015.7.20	荒川和子
1250	2016- 20	1	54	北海道十勝郡浦幌町万年	2015.7.20	荒川和子
1251	2016- 21	2	49	北海道十勝郡浦幌町東山	2015.7.20	荒川和子
1252	2016- 22	1	58	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.8.31	荒川和子
ウラギンスジヒョウモン　*Argyonome laodice* PALLAS						
1253	2016- 23	1	48	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.8. 4	荒川和子
1254	2016- 63	1	51	北海道十勝郡浦幌町南町	2015.8.27	荒川和子
オオウラギンスジヒョウモン　*Argyonome ruslana* MOTSCHULSKY						
1255	2016- 24	1	57	北海道十勝郡浦幌町東山	2015.8. 4	荒川和子
1256	2016- 25	1	58	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.8.31	荒川和子
ギンボシヒョウモン　*Speyeria (Mesoacidalia) aglaja* LINNAEUS						
1257	2016- 26	2	54～58	北海道十勝郡浦幌町東山	2015.7.12	荒川和子
1258	2016- 27	1	55	北海道十勝郡浦幌町東山	2015.8. 2	荒川和子
1259	2016- 28	1	55	北海道十勝郡浦幌町平和塔	2015.8. 2	荒川和子
1260	2016- 64	1	62	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.8.27	荒川和子
ミドリヒョウモン　*Argynnis paphia* LINNAEUS						
1261	2016- 29	2	63	北海道十勝郡浦幌町東山	2015.7.19	荒川和子
1262	2016- 30	1	55	北海道十勝郡浦幌町東山	2015.7.20	荒川和子
1263	2016- 31	1	56	北海道十勝郡浦幌町東山	2015.9. 1	荒川和子
シータテハ　*Polygonia c-album* LINNAEUS						
1264	2016- 32	1	44	北海道十勝郡浦幌町東山	2015.9. 1	荒川和子
エルタテハ　*Nymphals vau-albnm* SCHIFFRMULLER						
1265	2016- 33	1	55	北海道十勝郡浦幌町南町	2015.4.26	荒川和子
1266	2016- 34	1	64	北海道十勝郡浦幌町平和塔	2015.7.19	荒川和子
コムラサキ　*Apatura metis* FREYER						
1267	2016- 69	1	64	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.7.30	山北つばさ
クジャクチョウ　*Inachio io* LINNAEUS						
1268	2016- 35	1	54	北海道十勝郡浦幌町宝町	2015.10.19	荒川和子
アカマダラ　*Araschnia levana* LINNAEUS						
1269	2016- 36	1	26	北海道十勝郡浦幌町相川	2015.5. 7	荒川和子
1270	2016- 37	1	35	北海道十勝郡浦幌町南町	2015.7.19	荒川和子
1271	2016- 38	2	32～38	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.8.31	荒川和子
1272	2016- 39	1	36	北海道十勝郡浦幌町東山	2015.9. 1	荒川和子
フタスジチョウ　*Neptis rivularis* BUTLER						
1273	2016- 40	1	44	北海道十勝郡浦幌町東山	2015.7.20	荒川和子
1274	2016- 41	1	47	北海道十勝郡浦幌町東山	2015.7.20	荒川和子
1275	2016- 42	1	43	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.8. 2	荒川和子
サトキマダラヒカゲ　*Neope goschkevitschii* MENETRIES						
1276	2016- 43	1	62	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.7.20	荒川和子
1277	2016- 44	1	58	北海道十勝郡浦幌町万年	2015.7.20	荒川和子
1278	2016- 45	1	60	北海道十勝郡浦幌町平和塔	2015.7.20	荒川和子
ヒメウラナミジャノメ　*Ypthima argus* BUTLER						
1279	2016- 48	1	37	北海道十勝郡浦幌町常豊	2015.7.19	荒川和子
シロオビヒメヒカゲ　*Lethe europa* FABRICIUS						
1280	2016- 52	3	31～34	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.6. 8	荒川和子

整理番号	受入番号	点数	計測値	採集地	採集年月日	採集者
クロヒカゲ *Lethe diana* BUTLER						
1281	2016- 49	1	42	北海道十勝郡浦幌町平和塔	2015.8. 2	荒川和子
1282	2016- 50	1	44	北海道十勝郡浦幌町平和塔	2015.8. 2	荒川和子
1283	2016- 51	1	45	北海道十勝郡浦幌町平和塔	2015.8. 4	荒川和子
ジャノメチョウ *Minois dryas* SCOPOLI						
1284	2016- 46	2	47～53	北海道十勝郡浦幌町常豊	2015.7.19	荒川和子
1285	2016- 47	1	53	北海道十勝郡浦幌町東山	2015.7.20	荒川和子
1287	2016- 65	1	60	北海道十勝郡浦幌町常豊	2015.8.29	荒川和子
1288	2016- 70	1	43	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.7.30	山北つばさ
シジミチョウ科 Lycaenidae						
ベニシジミ *Lycaena phlaeas* LINNAEUS						
1289	2016- 53	1	30	北海道十勝郡浦幌町留真	2015.8.27	荒川和子
1290	2016- 54	1	26	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.9.16	荒川和子
ルリシジミ *Celastrina argiolus* LINNAEUS						
1291	2016- 55	2	23～29	北海道十勝郡浦幌町常豊	2015.7.19	荒川和子
1292	2016- 56	1	23	北海道十勝郡浦幌町東山	2015.7.20	荒川和子
1294	2016- 57	1	24	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.8. 2	荒川和子
ツバメシジミ *Everes argiades* PALLAS						
1295	2016- 58	2	23～25	北海道十勝郡浦幌町東山	2015.8. 2	荒川和子
1296	2016- 59	1	26	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.8. 2	荒川和子
コツバメ *Callophrys ferrea* BUTLER						
1297	2016- 60	1	27	北海道十勝郡浦幌町南町	2015.5.12	荒川和子
オオミドリシジミ *Favonius orientalis* MURRAY						
1298	2016- 61	1	34	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2015.8.27	荒川和子

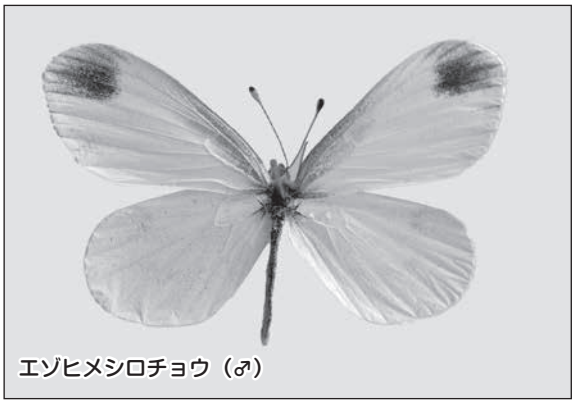
参 考 文 献

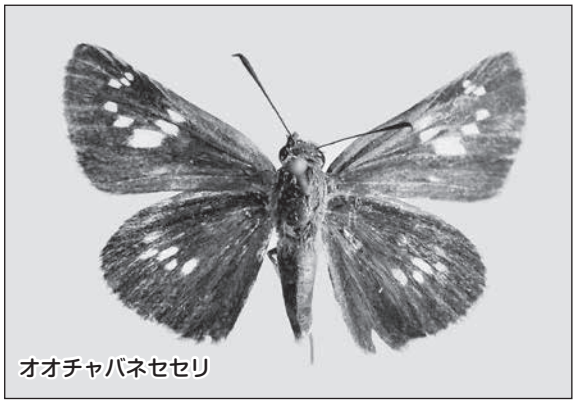
川副昭人・若林守男．1976．原色日本蝶類図鑑：全改訂新版，422pp. 保育社，東京.
志村　隆．2007．日本産蝶類標準図鑑，336pp．学習研究社，東京.
堀繁久・桜井正俊．2015．昆虫図鑑北海道の蝶と蛾．422pp．北海道新聞社，札幌.


ミヤマカラスアゲハ

モンキチョウ

エゾスジグロシロチョウ


エゾヒメシロチョウ（♂）


オオチャバネセセリ

チャマダラセセリ

コキマダラセセリ

ウラギンヒョウモン

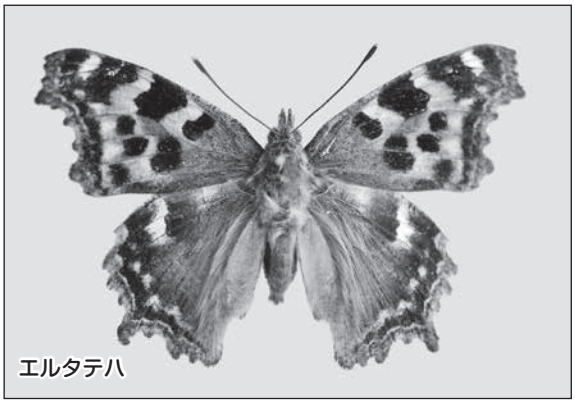
ウラギンスジヒョウモン

オオウラギンスジヒョウモン

ギンボシヒョウモン

ミドリヒョウモン

シータテハ


エルタテハ

コムラサキ

クジャクチョウ

アカマダラ

フタスジチョウ

サトキマダラヒカゲ

ヒメウラナミジャノメ

シロオビヒメヒカゲ

クロヒカゲ

ジャノメチョウ

ベニシジミ

ルリシジミ

ツバメシジミ

コツバメ

オオミドリシジミ

浦幌町立博物館紀要　第16号　2016年3月　9－13

浦幌で初めてのウチダザリガニ駆除

円子 紳一 *

Shinichi Maruko, 2016. The first time extermination of *Pacifastacus luniusculus trowbridgii* in Urahoro, Hokkaido.
Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 16: 9-13.

はじめに

特定外来生物に指定されているウチダザリガニ（ザリガニ科 *Pacifastacus luniusculus trowbridgii*）が、2014 年 9 月に浦幌川に生息していることが確認された。

町民からの情報によると、15 年ほど前に浦幌川と支流のオベトン川に放流した人が複数いたとのことである。話からすると釧路湿原の河川・湖沼で採集したものを持ち帰り、飼育できずに浦幌川と支流に放流したもので、量的には不明だがバケツ 1 杯あったとのことである。

ウチダザリガニはアメリカのコロンビア川周辺が原産地であり、1926 年から 1930 年にかけて北海道のほか 1 都 1 府 21 県に、当時の農林省水産局が優良水族導入（食用）として移入した。北海道では 1930 年に摩周湖に放流され、そこから持ち出された個体の放逐により分布を拡大しているとされる。

2004 年 5 月に「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」が成立。同法は 2005 年 6 月に施行され、ウチダザリガニは同年 12 月の第二次指定リストで追加された。

ウチダザリガニ

ウチダザリガニは体長 15㎝以上にもなり、在来のニホンザリガニの 2 倍ほどに成長する。両種の違いは①大きさが違う②ウチダザリガニは第一胸脚（ハサミ）の可動部に目立つ白斑がある③ウチダザリガニの頭（額角先端）には 3 つのとがった山がある（ニホンザリガニは 1 つの大きな山）④ハサミの下（腕節）にウチダザリガニはトゲがない（ニホンザリガニはある）などである。

ウチダザリガニが問題視されるのは、主に①餌や生息地の競合、直接の捕食によりニホンザリガニを駆逐すること②水カビ菌（ザリガニペスト）の保菌者となり、ニホンザリガニは感染すると 100％致死する恐れがあること③底生魚類・植物など水生生物の食害などがあげられる。

図 1　捕獲されたウチダザリガニ

然別湖では北海道天然記念物のミヤベイワナ（オショロコマの亜種）の生息地で、産卵に利用される水草が食害などで荒らされていて、2015 年 7 月 28 日には 1 日で約 2,300 匹も捕獲された。

摩周湖では国の天然記念物マリモに穴を開けることも報告されている。

防除認定申請

「浦幌の自然を楽しむ会」では 2015 年、実態調査と駆除のため必要な手続きを行った。特定外来生物に指定されている本種の駆除には、「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」に基づき、環境省北海道地方環境事務所から防除に係る認定を受けた。

調査を進めるなかで対象地域全体に生息を確認したので、町内全域を調査区域とする内容変更を申請し認定を受けた。

また、カニカゴを使って捕獲するため、「北海道内水面

* 浦幌の自然を楽しむ会　〒 089-5634　北海道十勝郡浦幌町字帯富

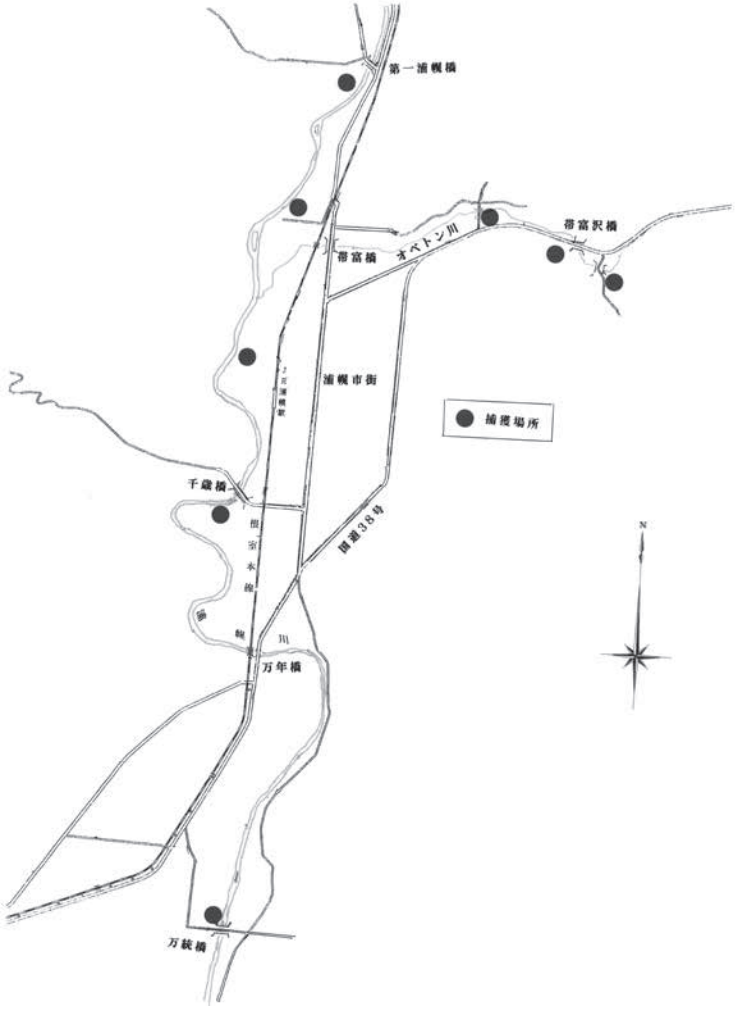


図２　ウチダザリガニの捕獲地点

漁業調整規則」に基づき北海道から内水面採捕の許可を受けた。

学習会の開催

浦幌町でのウチダザリガニ駆除は初めての試みである。調査・駆除に関する知識が皆無だったことから、９月 20 日に町教育文化センターで「ウチダザリガニってどんなザリガニ？」と題した学習会をうらほろスタイル・ゼミナールとして本会と町立博物館・中央公民館の共催で開催した。講師に美幌博物館の町田善康学芸員を迎えて、生態や外来種問題を学んだ。

図３　標本を前に説明する町田学芸員（左）

調査区域と調査・駆除方法

調査区域は、放流情報をもとに、十勝川水系浦幌川の第１浦幌橋から万統橋までの区域、同川支流オベトン川の浦幌川合流点から国道 38 号線までの区間とその上流（図２）とした。

調査は、2015 年７月 29 日から 11 月７日までに 10 回試みた。本会の会員述べ 19 人、浦幌町立博物館の持田誠学芸員、11 月７日は酪農学園大学の佐藤喜和教授と学生ら 17 人が駆除体験した。

捕獲方法は、スルメを餌としたザリガニ釣りと冷凍サンマを餌としたカニカゴの設置、たも網への足による追い込みを行った。

図4　ウチダザリガニの塩ゆで作業

図5　ウチダザリガニの計測

捕獲したウチダザリガニは、その場で全長と体重を計測し記録後に殺処分した。11月7日に捕獲したものは浦幌町立博物館へ寄贈し冷凍処理した。

結果と考察

生息は当初の調査区域である十勝川水系浦幌川の第1浦幌橋から万統橋までの区域、同川支流オベトン川の浦幌川合流点から国道38号線までの区間とその上流で確認された。このことから生育区域が拡大していると考えられるため、出来るだけ広範囲の調査を行なう必要がある。

今年の調査で捕獲したウチダザリガニは、合計111匹だった。雌雄の内訳はオス55匹、メス45匹、不明11匹であった。小さな個体は雌雄判別が出来なかった。

全長、体重ともに計測できた個体によると、全長の平均値は85.48㎜（最大値129㎜、最小値19㎜）、体重の平均値は34.38 g（最大値97 g、最小値7 g）であった。最大個体は、オスが121㎜、97 g、メスが129㎜、76 gだった。

浦幌川の森永乳業裏では、7月30日24匹、8月7日15匹、11日22匹が捕獲され、生息数が減少したとは思えない状況である。特に11日はカニカゴを設置してからわずか30分ほどで捕獲できた。

また、11月1日に浦幌川で捕獲したもののうち2匹が抱卵していた。まだまだ実態をつかめていなが、11月7日にオベトン川で捕獲された12匹は19㎜から42㎜と小さな個体だったことからも繁殖していることは間違いないと思われる。

個体ごとの計測値などの記録を表1に掲載した。図6に全長と体重、図7に全長と個体数、図8に体重と個体数のグラフを掲載したが、個体数が少ないので今回の結果が示す傾向として参考に資するものである。

浦幌での影響

浦幌町でのニホンザリガニの生息地は、筆者が知る限りでは中浦幌地域から海岸付近であるが、オベトン川のようにニホンザリガニの生息地域にウチダザリガニが侵入していることを考えると、町内各地で同様な事態が心

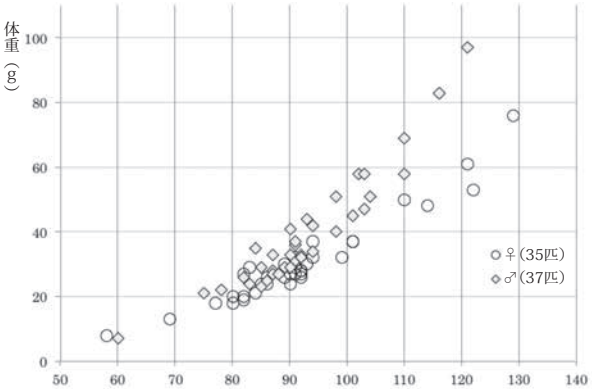


図6　ウチダザリガニの全長と体重の関係

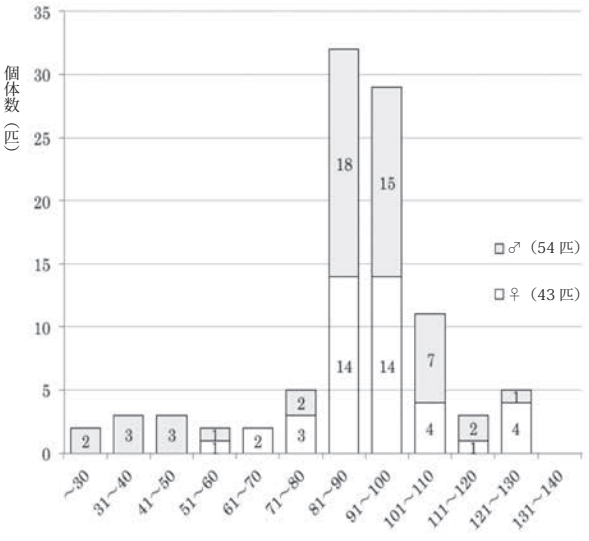


図7　ウチダザリガニの全長と個体数の関係

配される。

また、浦幌十勝川ではワカサギなども生息し、かつては十勝太の新川でシシャモの放流も行われていたが、生息域が拡大していると小魚や秋サケの卵・稚魚の食害なども懸念される。

今後の対策

浦幌川本流での完全な駆除は不可能と考えられるため、同川では分布域の調査を基本として、これ以上の拡大を防止する対策の検討が必要である。

特に、オベトン川はニホンザリガニとの競合が心配だが、小河川なので徹底した駆除が可能と思われるので、今後も継続して駆除を実施することが望まれる。

おわりに

本来は生息していない地に出現したウチダザリガニ。人間の都合で移入された本種を始めミンクやアライグマなどは、生態系に重大な影響を与えることが心配され、外来生物として嫌われ者扱いされている。でも、これらの生物もその地で懸命に生きているのである。

彼らを嫌われ者扱いするのではなく、それぞれの命を考えて対処することも必要で、なぜ駆除しなければならないのか、どのような対応が必要なのかを町民や子どもたちに伝えたいと思う。

謝　辞

「浦幌の自然を楽しむ会」の活動の一環としてウチダザリガニ駆除に参加した吉原敬司会長、川畑裕幸副会長、堀川真一氏、佐藤芳雄氏、春日基江氏、荒川和子氏と、日頃からアドバイスいただいた浦幌町立博物館の持田誠学芸員、講習会で講師をお願いした美幌博物館の町田善康学芸員に心から感謝申し上げる。

また、特定外来生物の防除の認定申請に際しては環境省釧路自然環境事務所の源関絢さん、同省北海道地方環境事務所の小関ますみさん、平井和登さん、小野良臣さん、北海道内水面漁業調整規則に係るかごによる採捕許可申請に際しては十勝総合振興局の熊谷直幸漁業管理係長、橋本和義主任から丁寧なご指導を、同帯広建設管理部浦幌出張所の次田満主査からかご設置について貴重なアドバイスをいただいたことに心からお礼申し上げる。

なお、本調査・駆除経費の多くは、浦幌町の「笑顔輝く地域づくり支援事業」の補助金を得て行われたものである。

参考文献・資料

北海道．2010．北海道の外来種リスト：北海道ブルーリスト 2010, 36pp. 北海道環境生活部環境局自然環境課特定生物グループ , 札幌.

町田善康．2015．ウチダザリガニってどんなザリガニ？．浦幌町立博物館講座資料.

円子紳一．2013．浦幌の外来種を考える．浦幌町立博物館紀要，13: 7-14.

斎藤和範・林直光．2006. 外来ザリガニ類の話．ファウラ , 12: 25.

十勝毎日新聞．2015．ウチダザリガニ駆除始まる　鹿追・然別湖．2015 年 7 月 30 日付〔電子版 http://kachimai.jp/article/index.php?no=308092〕

吉田剛司・上原裕世．2014．継続は力なり　洞爺湖で

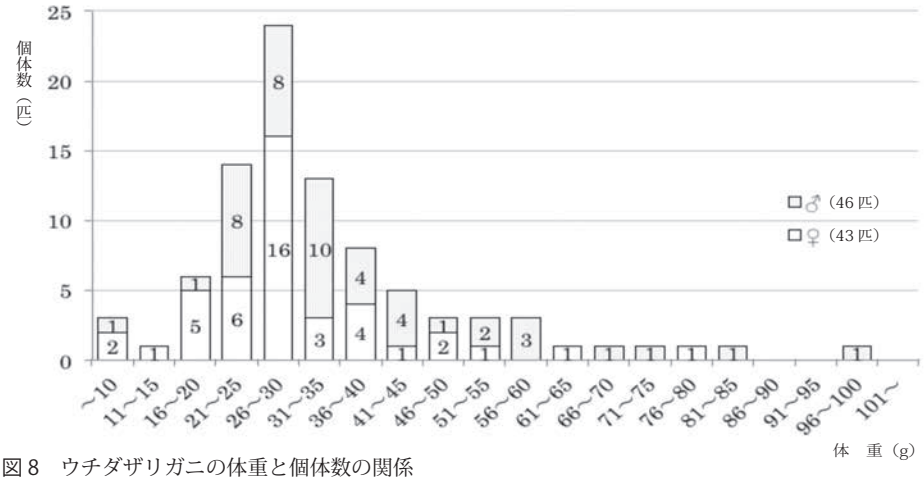


図 8　ウチダザリガニの体重と個体数の関係

のウチダザリガニ対策の過去・未来．モーリー，37: 10-13.
北海道環境生活部環境局生物多様性保全課「ウチダザリガニのページ」〔http://www.pref.hokkaido. lg.jp/ks/skn/alien/zarigani/zarigani_top.htm〕

表１　ウチダザリガニの計測値

No.	全長 mm	体重 g	雌雄 ♂・♀	鋏の状況
1	104	56	不明	
2	92	28	♀	
3	102	58	♂	
4	91	27	♀	
5	93	30	♀	
6	84	35	♂	
7	92	26	♀	
8	91	31	♂	
9	106	37	♀	右欠損
10	86	24	♀	
11	98	51	♂	
12	82	27	♀	
13	94	37	♀	
14	89	30	♀	
15	69	13	♀	
16	89	29	♂	
17	99	32	♀	
18	83	29	♀	
19	92	33	♂	
20	103	58	♂	
21	104	51	♂	
22	90	24	♀	
23	92	32	♂	
24	86	26	♀	
25	121	97	♂	
26	129	76	♀	
27	90	41	♂	
28	116	83	♂	
29	91	36	♂	
30	87	33	♂	
31	122	53	♀	
32	100	27	♀	両欠損
33	90	27	♀	
34	82	20	♀	
35	85	29	♂	
36	88	23	♂	左小
37	94	34	♂	
38	89	26	♀	
39	85	23	♂	
40	78	22	♂	

No.	全長 mm	体重 g	♂♀	鋏の状況
41	85	24	♀	
42	84	21	♀	
43	58	8	♀	
44	62	9	♀	右欠損
45	60	7	♂	
46	112	60	不明	
47	94	42	♂	
48	92	32	♂	
49	98	40	♂	右小
50	93	31	♂	両欠損
51	110	69	♂	
52	93	44	♂	
53	114	48	♀	
54	90	33	♂	
55	101	45	♂	
56	101	37	♀	
57	96	26	♀	右欠損
58	87	28	♂	
59	83	24	♂	
60	82	19	♀	
61	110	58	♂	
62	92	26	♂	左小
63	88	23	♂	左小
64	90	23	♀	左欠損
65	85	24	♂	左小
66	94	32	♀	
67	88	21	♀	右欠損
68	121	61	♀	
69	91	29	♀	右小
70	120	74	♂	左欠損
71	91	32	♀	
72	77	18	♀	
73	122	45	♀	両欠損
74	80	20	♀	
75	110	50	♀	
76	86	25	♂	
77	96	35	♂	右小
78	82	26	♂	
79	92	27	♀	
80	75	21	♂	

No.	全長 mm	体重 g	♂♀	鋏の状況
81	101	37	♀	
82	98	40	♂	
83	87	27	♂	
84	80	18	♀	
85	91	37	♂	
86	103	47	♂	
87	88	27	♂	
88	92	28	♀	
89	91	29	♀	
90	82	19	♂	右小
91	90	29	♂	
92			♂	
93			♀	抱卵
94			♀	抱卵
95			不明	
96			不明	
97			不明	
98			不明	
99			不明	
100	37		♂	
101	41		♂	
102	42		♂	
103	32		♂	
104	41		♂	
105	34		♂	
106	21		不明	
107	21		不明	
108	19		不明	
109	27		♂	
110	23		♂	
111	20		不明	
平均	85.48	34.38		
		♂	55	
		♀	45	
		不明	11	
		計	111	

※ No.1、46 は雌雄未確認
※ No.92 ～ 99 は全長、体重ともに未計測
※ No.95 ～ 99 は、雌雄未確認
※ No.100 ～ 111 は、体重未計測
※ No.106 ～ 108、111 は、小さいため雌雄判別不能

浦幌町立博物館紀要　第16号　2016年3月　15－18

カブスゲ *Carex cespitosa* L. のヤチボウズ断面

持田　誠 *・加藤 ゆき恵 **

Makoto Mochida & Yukie Kato, 2016. The cross section of tocksock "Yachi-Bouzu" on *Carex cespitosa* L. in Urahoro, Hokkaido.
Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 16: 15-18.

はじめに

カブスゲ *Carex cespitosa* L. は北海道東部の湿地帯に見られるカヤツリグサ科スゲ属の多年生草本である。ヨーロッパからアジアにかけて見られる、いわゆる「周北極要素」の植物のひとつで、しばしば大きく株状に発達し、ヤチボウズ（谷地坊主 tocksock）を形成する種として知られる（星野ほか 2011、勝山 2015）。

ヤチボウズについては、凍結土壌地形における特異的な景観要素として古くから知られているが（尾方 2006）、その具体的な構造、形成、発達などについて論じた報告うは少ない。そこで本報では、浦幌に自生するカブスゲのヤチボウズを対象に、縦断面の観察を実施したので、概要を報告する。

材料および方法

材料は、北海道十勝郡浦幌町字上厚内の小沢に自生するカブスゲのヤチボウズである。2015 年 6 月 21 日に、博物館講座「ヤチボウズ大解剖！」を開催するのに併せて、観察を実施した。なお、午前中に一般参加による講座での観察を実施し、午後に植物学者のみによる詳細な観察をあらためて実施した。

対象となるカブスゲは沢沿いの湿地に自生している株とした。観察当時、周囲には沢の中で流水に根元が浸っている個体も存在したが、観察個体は水に浸ってはいなかった。フェノロジーとしては、すでに結実の最盛期を過ぎていた。

供試したのは 2 株で、発達途上の比較的若い元気なヤチボウズ（高さ 28cm。ヤチボウズ面のみで草高を含まない）と、壮齢のヤチボウズ（高さ 38cm。ヤチボウズ面のみで草高を含まない）の 2 株を用いた。

まず、ヤチボウズの形状が観察しやすいように、鎌を用いてカブスゲの地上茎を刈り払った。次に小型の竹挽き鋸によって、天頂部から根元に向かって縦に切れ目を入れた。最後に地際で横から竹挽き鋸で切れ目を入れ、縦断面が見えるようにヤチボウズの半分を切除した。

図 1　供試したカブスゲのヤチボウズ

また、切除したヤチボウズは、部位別に内部が観察できるよう、縦断面を高さ 5cm 毎に横断した。これにより、横断面も観察できるようになった。

結果および考察

縦断面を観察したところ、若いヤチボウズでは根茎が非常に緻密に発達しており、断面を叩くとコンコンと音が出るほど硬かった。しかし、壮齢のヤチボウズでは、衰弱・腐食化により根茎の緻密さが落ちて土壌に空間が出来ており、縦断面は比較的柔らかさがあった（図 2）。

ヤチボウズの天頂部付近では、細かな根が緻密に固まっているのに対し、下部へ行くほど太い根茎の間に土壌が詰まっている様子が見られた（図 3）。水分も下部へ行く程多くなり、天頂部付近は比較的乾燥していた。

また、上部では根茎が縦横に走行しているのに対し、下部へ行くほど縦方向（天地方向）への走行が多くなる

* 浦幌町立博物館　〒 089-5614　北海道十勝郡浦幌町字桜町 16-1
** 釧路市立博物館　〒 085-0822　北海道釧路市春湖台 1-7

図 2　左：若齢のヤチボウズ　右：壮齢のヤチボウズ

図 3　壮齢のヤチボウズ断面

傾向が観察された（図 4）。最も地表面に近い部分では、手でほぐすと、縦方向に走行する根がほどけて、束状にほどける様子も観察する事ができた（図 5）。

全体に表層部は緻密で乾燥しており、ヤチボウズ中心部へ向かうに従い土壌化が進み、特に地表面に近い部分ほど走行する太めの根茎の間に土壌の割合が高まる傾向にあると言える。また、地表面に近い下部では、縦方向に根茎が走行し、根が土壌をつかんで、ヤチボウズとして立ち上がる基礎（土台）を形成しているものと推察られる。

なお、老齢なヤチボウズの上部にはキイロケアリ *Lasius flavus* Fabricius J.C. 、エゾクシケアリ *Myrmica jessensis* Forel, A. などが営巣している様子が観察された（図 6）。従来から、ヤチボウズには各種のアリが営巣している現象が観察されている。一方、今回の観察では若いヤチボウズでは表面にはアリが観察されるものの、内部への営巣は見られなかった。緻密な根茎と土壌間隙の割合が影響している可能性があるが、さらに多くの個体の観察が必要と思われる。

ヤチボウズを形成するスゲには、カブスゲの他、ヒラギシスゲ *Carex augustinowiczii* Meinsh. ex Korsh. 、オオアゼスゲ *C. thunbergii* Steud. var. *appendiculata* (Trautv. et C.A.Mey.) Ohwi、シュミットスゲ *C. schmidtii* Meinsh.、ヌマクロボスゲ *C. meyeriana* Kunth、タニガワスゲ *C. forficula* Franch. et Sav. が知られている（勝山 2015b）。このうち、ヒラギシスゲは浦幌でもヤチボウズを観察する事ができるが、カブスゲに比べると少ない。また、タニガワスゲは近年になってヤチボウズを形成する事が知られた種で（勝山 2015b）、浦幌でも本調査地に同所的に生育しているのが観察されるものの、ヤチボウズは形成していない。

ヤチボウズについては、群落学的な記載研究は進められてきたが、ヤチボウズそのものの構造や成立に関する研究はまだ少ないと思われる。今後は観察事例を増やし、より詳細な記載を行うと共に、ヤチボウズを構成する種

図４　天頂部（右）から地際（左）へ 5cm ごとに縦断面を分割し、横断面と共に比較

図５　地際 5cm の縦断面の根茎をほぐしたもの

や立地にも着目して、比較・検討を進めて行く事が必要である。

ヌタベット湿原のヤチボウズ

今回の観察会では、上厚内地区に自生するカブスゲの

図６　ヤチボウズに営巣するキイロケアリ

ヤチボウズの他、浦幌町民に存在が広く知られていた豊北地区のヌタベット湿原におけるヤチボウズについても、同様の観察を実施した。しかし、観察の結果、ヌタベットのヤチボウズは上厚内のものとは大きく性質を異にするものである事がわかった。

外見上は明らかにヤチボウズであるが、今回、詳細な観察をした結果、ヤチボウズ本来の母体であるカブスゲがほとんど見られず、構成植物の大半がイネ科植物であった。観察会の席上では、これを湿地の乾燥化によるカブスゲの衰退によるものではないかとの仮説を呈示したが、そもそもこれが一般的なヤチボウズの定義に該当するものなのか、観察結果からは疑問が残るものとなった。引き続き、詳細な観察と比較・検討が必要である。

謝　辞

観察にあたり、札幌市博物館活動センターの山崎真実学芸員の助言、協力を得た。また、円子紳一氏には、写真を提供いただいた。深く感謝申し上げる。

本調査で撮影したヤチボウズの断面写真については、2015 年度神奈川県立生命の星・地球博物館企画展「日本のスゲ勢揃い：撮って集めた 269 種」で展示した。展示の機会を頂いた同館の勝山輝男学芸員、大西亘学芸員に感謝申し上げる。

引用文献

星野卓二・正木智美・西本眞理子．2011．日本カヤツリグサ科植物図譜．778pp．平凡社，東京．

勝山輝男．2015a．日本のスゲ：増補改訂 , 391pp．文一総合出版，東京．

勝山輝男．2015b．スゲ属植物たちが作る「坊主たち」．自然科学のとびら , 21(3): 18-19.

尾方隆幸．2006．日本に分布する小規模凍結マウンドの分類 , 定義とその問題点．日本地理学会発表要旨集, 70: 34.

浦幌町立博物館紀要　第16号　2016年3月　19－20

十勝川で確認されたアライグマ *Procyon lotor* Linnaeus

武藤 満雄 *・持田　誠 **

Mitsuo Muto & Makoto Mochida, 2016. Record of *Procyon lotor* (Linnaeus 1958) in the Tokachi river, Hokkaido.
Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 16: 19-20.

図１　アライグマの事故死体が確認された、十勝川の十勝河口橋の位置（右下の矢印）。地図の左上が帯広市街地。十勝川の左岸（地図の右側）が浦幌町。（国土地理院 20 万分 1 地勢図「広尾」に加筆）

十勝川の河口に近い道路橋上で、アライグマ *Procyon lotor* (Linnaeus 1958) の交通事故死体を確認した。アライグマは外来生物法の「特定外来生物」に指定されている北アメリカ原産の中型哺乳類である（池田 2008）。生物多様性保全や農業被害などへの影響が大きい事から、分布・拡散動向を正確に把握しておく事が重要である（環境省北海道環境事務所 2008）。浦幌地区では、これまで明確にアライグマとされる死体の確認は無かったため、報告して記録とする。

確認したのは 2014 年 7 月 15 日で、場所は国道 336 号線の「十勝河口橋」上の車道である。十勝河口橋は十勝川上に架橋されており、地理的には北海道十勝郡浦幌町の南部および中川郡豊頃町北東部が接する町境界にあたる。死体は後頭部から背面にかけて損傷が見られ、前夜のうちに走行する自動車と衝突したものと思われる。

図1　十勝河口橋で確認されたアライグマの事故死体。（撮影者：武藤満雄。2014 年 7 月 15 日）

浦幌町内では、国道 38 号線などの路上で、エゾタヌキ *Nyctereutes procyonides albus* (Beard, 1904) の交通事故死体を見る事が多い。しかし、死体には①尾に明瞭な縞がある、②眉間に黒い筋が入っている、③耳の縁が白いの 3 点か

* 浦幌野鳥倶楽部　〒 089-5636　北海道十勝郡浦幌町字万年
** 浦幌町立博物館　〒 089-5614　北海道十勝郡浦幌町字桜町 16-1

らアライグマと認められた。

今回の確認地点は、浦幌・豊頃両町の境界にあたり、どちらの町由来の個体かは不明である。北海道の調査によると、2015（平成 27）年度末の段階で道内 147 市町村からアライグマの生息･目撃が確認されている。しかし、この時点で浦幌、豊頃両町からは確認情報が無い事になっている（アライグマの生息市町村数と捕獲数等の推移：北海道ホームページ http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/araiguma/gennjyo25.pdf）。

一方、幕別町や池田町からは既に確認がされている事から、今回の個体がこれらの町から移動してきた可能性も推察される。しかし、いずれにしても今回、十勝河口橋上で交通事故死体が確認された事で、十勝川河口域でも既にアライグマが侵入・定着している可能性も捨てきれない事から、今後、浦幌・豊頃両町における本種の情報を積極的に収集し、現状把握に努める必要があると考えられる。

引用文献

北海道環境生活部．アライグマの生息市町村数と捕獲数等の推移．北海道環境生活部「アライグマ対策のページ」http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/araiguma/gennjyo25.pdf〔2016 年 1 月 31 日閲覧〕

池田透．2008．外来種問題：アライグマを中心に．大泰司紀之・三浦慎吾監修，日本の哺乳類学．pp.369-400. 東京大学出版会，東京.

環境省北海道地方環境事務所野生生物課．2008．地域からアライグマを排除するための手引き．60pp．環境省・北海道地方環境事務所野生生物課・NPO 法人 Ensition 環境事務所，札幌.

浦幌町立博物館紀要　第16号　2016年3月　21－22

浦幌で回収したアオジ *Emberiza spodocephala* Pallas の標識個体

持田　誠 *

Makoto Mochida, 2016. The recovered of labeled *Emberiza spodocephala* Pallas from Urahoro, Hokkaido.
Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 16: 21-22.

はじめに

アオジ *Emberiza spodocephala* Pallas は、シベリア南部からバイカル湖周辺を含むアムール川周辺の極東地域、サハリン、千島列島、オホーツク海沿岸、北日本、中国北東部にかけて繁殖し、冬季は朝鮮半島、西日本、東南アジア方面へ南下する、ホオジロ科の渡り鳥である。北海道へは毎年夏鳥として飛来し、平地から山地までの、市街地を含む多様な環境で見られる、きわめて身近な鳥のひとつと言える（高野 2015）。

2015 年 7 月に、浦幌町豊北の民有地内で、右脚に金属製の足輪の付いたアオジの死体が採集された。この足輪は、環境省が実施している「鳥類標識調査」で装着された「標識」だった事から、浦幌町立博物館で鳥類死体ごと受領し、環境省から調査の委託を受けている山階鳥類研究所へ通報したところ、詳細な個体データを得る事ができたので、同研究所の許可を得て報告する。

なお、鳥類標識調査では、標識個体の拾得について「回収」と表記する事から、本報でも以後、「回収」と表記する。

採集時の状況

アオジの死体は、2015 年 4 月 24 日、北海道十勝郡浦幌町豊北の民有地で、町民により発見された。午前 10 時頃、建物の東側扉の下に鳥が落ちていると、浦幌町役場に電話連絡があった。死体の発見者によると、この扉によく鳥があたって落ちるので、この鳥も衝突で死んだのではないか？との事であった。回収時はまだ生暖かかったので、衝突死直後のものと思われた。

10 時 45 分頃に、連絡を受けた浦幌町役場町民課の職員により回収された。その後、死体にタグ（足輪）が付いている旨の連絡が教育委員会の文化財係へ入ったが、たまたま筆者が居合わせたため、鳥類標識調査個体（標識鳥）である可能性が高い事から、死体ごと博物館への引き渡しを要請した。

図 1　回収されたアオジの衝突死個体。右脚に標識リングが装着されているのがわかる（矢印）

引き渡し時に標識を確認したところ、環境省の表示があったため、この時点で標識鳥である事を認めた。死体を博物館へ移送後、種をアオジと同定し、標識の解除と記載事項の確認を行った。標識記載事項は次のとおりである。

KANKYOSHO
2AD JAPAN
30440

その後、ただちに山階鳥類研究所へ電子メールで連絡をした。標識・個体は博物館の冷凍庫で保存した後、後日山階鳥類研究所へ発送した。

標識町回収記録

回収された個体は、アオジの雌成鳥である。標識が日本の環境省が装着したものであったため、山階鳥類研究所のデータベースで標識装着時の情報が確認された。それによると、回収個体は 2011 年 11 月 1 日に、神奈川県相模原市で捕獲・標識装着・放鳥されたものである事が判明した。また、標識装着時は初年度冬羽（1W）であり、

* 浦幌町立博物館　〒 089-5614　北海道十勝郡浦幌町字桜町 16-1

回収時点で３歳～４歳だったものと考えられる。

放鳥地点と回収地点の直線距離は879km、放鳥から回収までの経過時間は３年５ヶ月（1270日）であった。

アオジは北海道では夏鳥だが、関東地方では冬鳥である事から、夏に北方で誕生した個体が2011年11月に神奈川県へ渡ってきた時点で捕獲・放鳥されたものと思われる。その後、2012～14年まで渡りを繰り返し、2015年４月に南方から渡って来たところで衝突死した可能性が考えられる。

鳥類標識調査の意義と普及の必要性

日本の鳥類標識調査は、1924年に農商務省によって実施されたのが始まりとされる。戦後は1961年から農林省、1972年からは環境省が調査を継続しており、千葉県我孫子市の山階鳥類研究所が「鳥類標識センター」として調査実務を受託している（環境省・山階鳥類研究所2015）。

鳥類標識調査は、「鳥類標識調査者（バンダー）」の資格を持つ専門の調査員が許可を得て野鳥を捕獲し、「標識」と呼ばれる、個体識別用の記号文字を刻印した金属製リングを野鳥の足に装着の上で放鳥し実施される。放鳥された「標識鳥」は、鳥類標識調査者による捕獲調査で再捕獲されるか、本報のような偶発的な第三者による発見によって回収され、放鳥時の記録と照合する事で、データが得られる。

標識調査からは、野鳥の行動範囲、年齢（寿命）、環境変動との関わりなどを知る事ができる。野鳥の寿命は、飼育下と野外では異なる可能性が高く、標識調査による回収データは貴重な記録となる。

また、標識鳥は、標識のみを送付する事も可能だが、今回のように個体ごと送付して標本とする事もできる。標識鳥は、野外での活動履歴が詳細なため、標本から得られるデータも貴重な資料となる。

浦幌町はヒシクイやオオハクチョウ、オオワシなどの渡り鳥の中継地点として全国的に知られた地域だが、オオワシなどの絶滅危惧種と異なり、アオジのような普通種の死体は、見つかってもゴミとして処分されてしまう可能性が高い。そのため、せっかく標識鳥を放鳥しても、回収がうまくいかなかったために、得られるはずだった貴重なデータが得られない危険がある。

このため、今回の回収にあたっては、広報などを通じて広く町民にも顛末を伝え、鳥類標識調査の意義の普及に努めた。今後、博物館としては、標識鳥から得られた研究成果の実例などを示しながら、標識調査の意義について引き続き広く普及に努めていく必要がある。

標本情報・回収記録

Emberiza spodocephala Pallas　アオジ　♀ Adult

＜回収＞

Date. Apr. 24, 2015　Collector. unknown

Loc. Japan, Hokkaido; Tokachi-gun, Urahoro-cho, Toyokita
（北海道十勝郡浦幌町字豊北）

Lat. 42.43N, 143.38E

Alt. 3-5m

回収整理番号：020339

標本番号：YIO-73012（山階鳥類研究所）

＜放鳥＞

Date. Nov. 1, 2011

Loc. Japan, Kanagawa pref., Sagamihara, Oshima, Kamizawa
（神奈川県相模原市緑区大島神沢）

Lat. 35.34N, 139.19E

Age: 1W

謝　辞

浦幌町役場町民課（当時）の菅原伊奈子氏はじめ、課の皆様方には、拾得者からの通報にもとづく回収時の情報の収集、個体の博物館への引渡しにあたり、さまざまな協力を頂いた。公益財団法人山階鳥類研究所保全研究室の東千鶴氏、吉安京子氏には、標識回収事務に際して御指導頂き、また当館紀要での報告について許可頂いた。

記して謝意を表する。

引用文献

高野伸二．2015．フィールドガイド日本の野鳥：増補改訂新版．392pp．日本野鳥の会，東京．

環境省・山階鳥類研究所．2015．渡り鳥と足環 Bird Banding．山階鳥類研究所，我孫子．

幾農第三號　　㊞　「受付印有」（紫スタンプ）　㊞

大正十四年十二月十七日

幾千世農業補習学校長　千葉　譲之助　㊞

浦幌村長　石原　重方　殿

農業補習学校開校ニ關スル件

登校開校ニ關シ本月二日吾照會申置候處其後強力勧誘ノ結果所定ノ人員ニ相達シ候ニ付本月二十日ヨリ授業開始可致候ニ付此段及報告候也

㊞

大正十二年十二月十日　　「受付印有」（紫スタンプ）

上常室尋常小學校　㊞

浦幌村長　石原　重方　殿

農業補習學校開校ノ件

本月一日ヨリ農業補習學校開校候条此段後通知及候也

入學者氏名	入學者氏名
竹田　一馬	吉井　國一
竹田　貞一	石田　武
山本　巧	橋本　清
清水　清光	橋本　茂丸
島田　榮	以上九名

目下極量区募集中ニテ他ニ一二名増加見込　㊞

第五号　大正四年十二月九日　㊞　（受付印有）

養老農業補習學校長　荒木　唯見　㊞

浦幌村長　石原　重方　殿

報告

農業補習學校入學生徒左記ノ通リ報告候也

記

前期入學者氏名

神田　政雄　安藤　文悦

秋山　浅吉　渡辺　一

長尾　良安　矢野　弥作

各務　謹司　岩井　保

下村　□五郎　各務　茂雄

沖田　利平　岡崎　善吾

後期入學氏名

神山　主計　安藤　一美

備考

尚三、四名入學者アル見込

青年團員総数二二名年令廿祭四以上ノモノ八名内妻アルモノ二名廿才以下十四名

幾農第二號

大正十四年十二月十六日

「受付印有（紫スタンプ）」　㊞

幾千世農業補習学校長　㊞

農業補習学校入学者ニ關スル件

本校入学希望生徒数本號ヲ以テ本月七日報告候處更ニ左記ノモノ入学申出候ニ付此段及報告候也

記

神谷　謹吾　大野　朝治

山田　楢次郎　鎌田　徳一郎

大野　貫一　仝　義江

記

一、前期一年生　吉田嘉本
一、仝　川口勝治
一、仝　松浦栄治郎
一、仝　阿部富治
一、後期一年生　林重雄
一、仝　林正治
一、仝　阿部芳三函
一、仝　山本重松
以上八名

幾農第二號　㊞
大正十四年十二月七日　「受付印有」（紫スタンプ）
幾千世農業補習学校長　㊞
浦幌村長　石原重方　殿

農業補習学校入学者ニ關スル件

浦第三六〇號御申越シノ農業補習学校生徒数后記ノ通リ有之候ニ付此段及報告候也

追而授業開始差支無之候哉又ハ開始見合セ可申□□何分ノ回報煩申添候

記（現在五出席義務者二十一名）（青インク加筆）

金田松次郎
向田政雄
小林藤藏
高橋七造
道佛末吉
林田豊吉
部田□一
松田茂助
西村滝雄
道佛松根
坂口長一

荒城　信　　渡辺次郎
大和田竹松
砂原政治郎
高田宗公
春日井定義
北原喜男
高坂一義
志賀　豊

大正十四年十二月七日　㊞　「受付印有」（紫スタンプ）　㊞

十勝郡川上農委業補習学校長　蓬田　新助

浦幌村長　石原　重方　殿

農業補習学校入学者報告ノ件

十二月四日付浦第三六〇三号御來照ノ補習学校入学者ハ本川上学校ニ入学ノ分左記ノ通ニ有リ此段御回報候也

記

石原徳治　　久保利重
石原盛治　　佐野庄八
杉本儀一　　佐藤　繁
村中作次郎　　松本長七
村中米三郎　　松本長八
中村　要　　黒沢信久義
松本長左エ門　　廣瀬哲好
森山富藏　　桝田清剛
経堂勝治　　佐藤茂十朗
松本長右エ門　　村中繁太郎

浦第参號　㊞　「受付印有」（紫スタンプ）　㊞

大正十四年十二月七日　　十勝郡川流布農業補習学校長

浦幌村長　殿

農業補習学校入学者人名報告ノ件

本日四日付浦第三六〇三號ヲ以テ御照會相成候本件ハ本月一日以来入学者ハ左記之通リ候也

追テ御来意ニ依リ精々勧誘中ニ有シ候

帶川　規雄	〃　四三、一一、七	〃	父　帶川由太郎	
遠藤　忠雄	〃　四二、一〇、二七	〃	父　遠藤吉太郎	
宮本　高雄	〃　四三、一、一〇	〃	兄　宮本　久松	
本田喜市郎	〃　四二、六、一五	〃	父　本田　市松	
馬場浅次郎	〃　四二、三、二二	〃	父　馬場小三郎	
大場　豊	〃　四二、五、二五	〃	父　馬場藤太郎	
大竹　鬼龍	〃　四二、七、一三	〃	父　大竹常太郎	
河内　甚作	〃　四二、一〇、一二	〃	父　河内　治作	
川畑　勝栄	〃　四五、六、五	〃	父　川畑　梅吉	
田中　光義	大正　元、八、七	〃	父　田中　由松	
帶川　朝夫	〃　二、三、二五	〃	父　帶川由太郎	
小川　光雄	明治四二、八、一五	〃	父　小川　長松	

十年未満二十名　外一名遠距離ノタメ通学不可能

四名他出目下不在、

㊞

「受付印有」（紫スタンプ）

大正十四年十二月八日　　貴老路農業補習学校長　㊞

北海道十勝郡公立貴老路尋常小學校長印

小林朔吉

浦幌村長　石原　重方　殿

農業補習学校生徒入学ノ件

十二月一日ヨリ當校入学生と左記ノ通リ此段報告候也

記

前期一学年

永森元治　伊場金作

渡辺豊八　森　武雄

［部（削除）田吉郎］　上田喜平

渡部　勇

後期一學年

松田　進　部田吉郎

大浦　盛　渡邊　薫

土本武雄　梅田隆男

第七二〇號　㊞　「受付印有」（紫スタンプ）

大正十四年十二月九日　㊞　㊞

常室農業補習學校長　三野　経太郎

浦幌村長　石原　重方　殿

農業補習學校入學者ニ關スル件

本月四日付浦第三六〇三號ヲ以テ依頼越サレ候本校生徒別紙ノ通リニ有之候條此段及報告候也

追而授業ハ本月一日ヨリ開始致居候

割印（欄外）

入學者氏名

前期第一學年	仝 第二學年	後期第一學年	仝 第二學年
○杉江　敏雄	○竹村　與市	○岡田　巌	○東等　正男
○竹村善太郎	○宮川　直治	○前出　友吉	○東等　武雄
○西田京次郎	○笠松　進	○吉　田稔	○松田　権助
○村瀬　正雄	○長谷川勝治	○白木　清	○田中　元恵
	○高山　清吉		
	竹村善太郎（削除）	○藤川冨士勝	田中　政衛
	○前出喜次郎		○前出　由造
	○岩城　徳吉		○小川　久七
			○臼井　実
			○杉江　輝雄

常室農補校

備考　○印ナキモノハ欠席者ナリ　尚六名入学見込アリ

浦第一號

大正十四年十二月七日

留真農業補習學校長　花見　八百三　㊞

「受付印有」（紫スタンプ）

浦幌村長　石原　重方　殿

農業補習學校入學者調ニ關スル件

本月四日附浦第三六〇三號ヲ以テ御照会相成候首題ノ件別紙ノ通リ及報告候也

農業補習學校生徒氏名調

生徒氏名	生年月日	住所	保護者氏名
岡本　秋雄	明治三八、五、一五	留真	父　岡本　喜市
田中　義雄	〃　三九、七、五	〃	父　田中　由松
長瀬由太郎	〃　四二、二、二〇	〃	父　長瀬金五郎
田中　秋雄	〃　四一、一二、三一	〃	父　田中　辰吉

第二号

大正十四年十二月六日　㊞　「受付印有」（紫スタンプ）　㊞

稲穂農業補習学校長　園田　久吉

浦幌村長　石原　重方　殿

農業補習学校入学者名報告

本校入学者氏名左記之通リ此段報告候也

追テ入学ニ該当スルモノ十七名ノ内左記十五名入学致候

記

氏名	氏名
金沢　勉	松本　義一
葭本　政一	小川　定雄
東野　寛治	小川　義造
福田　乙吉	田中　一雄
丹羽　釵義	中井　勝栄
芳賀　利太郎	越坂　鉄治
柏山　仙松	鉢木　政治
松本　之	

以上

第一号

大正十四年十二月五日　十勝郡活平農業補習學校長　私市　貞松　㊞

浦幌村長　石原　重方　殿　㊞　㊞

農業補習學校入學者ノ件　㊞　「受付印有」（紫スタンプ）

本月四日付浦第三六〇三号御依頼ノ件左記及回報候也

記

友髙　利一　山久保　稔　飯田　伊作　林　静　三浦　克郎

加藤　清江　中川　實衛　香川　正信　谷川　貞男　谷川　繁市

以上十名

入學勸誘中ノモノ

大西　一男　林　利雄　海藤芳次郎　香川　明　友髙　憲三

大正十四年十二月四日發議　大正十四年十二月四日議決　大正14年12月4日發送㊞　浄書㊞　校合㊞

村長　㊞　首席　㊞　合議　主任　發議者　㊞

番號　浦第三、六〇三號　發信者　「村長」（加筆）

宛名　各青年分団長　宛

件名　農業補習学校入学者勧誘方ノ件

本村農業補習学校ハ本年度ヨリ各小学校ニ併設セラレ本月一日ヨリ授業開始可相成候處多数入学者ヲ得テ本校設立ノ目的ヲ達成致度「（削除）時怜モ農閑期ニ在シ候条）」

詳細ハ当該学校長ト打合セノ上團員多数入学セシル様極力御勧誘相成度申進候也

浦第弐號

大正十四年十二月三十日　十勝郡川流布農業補習学校長

浦幌村長　殿　㊞

補習学校招学開始之件

農業補習学校招学本月一日より授業開始致居候条右及報告也

追テ入学者目下七，八名ニ有之候も追々増加之見込なり

㊞

第三九號　「受付印有」（紫スタンプ）　㊞

大正十四年十二月五日

浦幌村長　殿　稲穂尋常小学校長

農業補習学校開校の件

本月一日ヨリ農業補習学校開始候條此段御通知ニ及候也

㊞

大正四年十二月六日　「受付印有」（紫スタンプ）

浦幌村長　石原　重方　殿　常盤実業補習學校長　真壁　林之助　㊞

農業補習學校入學者氏名報告之件

本校入學者氏名左記之通リ候條此段及御回答候也

記

加藤　始	五十嵐　新太郎	長代　幸市	以上十八名
加藤　一麻	秋元　長助	松本　仁助	内尋六男四
中川　禎一郎	秋元　本三郎	小山　速男	名ヲ含ム
中川　敬三	横山　信一	益子　末藏	
鶴巻　艶治	横山　榮作	横山　正見	
鶴巻　清松	長代　石藏	加藤　重文	

浦第三、五八三號

大正十四年十二月四日 ㊞

「大正拾四年十二月四日」（藍色スタンプ） ㊞

決（欄外）

浦幌村長　石原　重方

裁

幾千世農業補習学校長　千葉　諶之助　殿

印

授業開始ニ關スル件

完（欄外）

票記ノ件御照会相成候処右ハ本日付第三六〇三號ノ趣旨ニ基キ此際極力入学者御勧誘ノ上其ノ氏名御回報相成様致度及御回答候也

結

票

決裁印

村長	首席	合議	主任
㊞	㊞		㊞

完結票

村長	首席	主任	施行	完結
㊞	㊞	㊞	濟	

「大正十四年十二月廿貳日」（紫スタンプ）

枠は朱欄外

「第（朱）一（黒）號（朱）」

幾農第一號

大正十四年十二月一日 ㊞

「受付印有」（紫スタンプ）

幾千世農業補習学校長　千葉　諶之助 ㊞

浦幌村長　石原　重方　殿

授業開始ニ關スル件

本校授業開始ニ就テハ目下極力生徒募集中ニ有之候ヘ共通学ノ關係上生徒数多数ニナラサルカ存シラレ候ガ斯ル場合ハ客年三月十二日浦第六四〇號ニ依リ授業開始見合セ可申候果又多少ニ關セズ授業開始致スベクヤ承知致度ニ付特急御回報煩候此段及御照会候也

大正十四年十二月四日發議　大正十四年十二月四日議決　大正14年12月4日發送㊞　浄書㊞　校合㊞

村長 ㊞　首席 ㊞　合議　主任　發議者 ㊞

番號　浦第三、六〇三號　發信者　「村長」（加筆）

宛名　各農業補習学校長　宛

件名　農業補習学校入学者勧誘方ノ件

本校入学者募集ニ付テハ夫々最善ノ努力ヲ致サレツ、アルモノトハ被存候得共客年三月浦第六四〇號ヲ以テ御依頼致置候如ク經費ノ関係上村會ノ希望スル所モ有候ニ付テハ此際青年分團長等ト御協議ノ上多数入学スル、様極力御勧誘相成度此段及依頼候也

追而入学者氏名至急御回報相成度申添候

八五	臨時休業ニ干スル件
八六	職員夏ニ干スル件季講習
八七	市町村立小学校教員数其他調査ノ件
八八	小学校教員免許状ニ干スル件
八九	勤王文庫ニ干スル件
九〇	渡菱三之住所問合セノ件
九一	皇國興廃額ニ干スル件
九二	小学校数及児童数調査ノ件
九三	全國実業補習学校廳会議ノ件
九四	観兵式参観ニ干スル件
九五	聯合少年オリンピック會概況報告ノ件
九六	公民教育講習ニ干スル件
九七	職員居所異動通知ノ件
九八	圖書館閲覧用圖書撤廃ニ干スル件
九九	長慶天皇ヲ皇代ニ別セラレタル教授上注意ノ件
一〇〇	小学校教育研究會出席者ニ干スル件
一〇一	小学校長会議開催ニ關スル件
一〇二	大正徳行録頒布ノ件
一〇三	第三回教育者産業講習会開催ノ件
一〇四	学校体操講習会開催ニ干スル件
一〇五	全國体育デーニ干スル件
一〇六	吃音矯正指導講習会ノ件

一〇七	学務委員当選通知書
一〇八	校舎落成式参列方案内状
一〇九	學林禮講配付ノ件
一一〇	歴代天皇の御在位年数尊號等ニ關シ教授上ノ注意事項ノ件
一一一	長慶天皇皇代ニ列セラレタルニ付神社ニ於テ行フ祭祀ノ件
一一二	教員居住通知ノ件
一一三	學林地植樹ニ干スル件
一一四	義務教育費國庫負担金ノ費途ニ干スル件
一一五	仝　　件
一一六	軍隊見学方ニ［付］干スル件
一一七	國定教科書供給状況報告廃止ノ件
一一八	特別税旅費支給ノ義許可申請
一一九	十勝教育會補助金請求書
一二〇	小学校教員住宅費補助申請
一二一	祝祭典ニ干スル件
一二二	哀悼ノ意ヲ表スル件
一二三	
一二四	
一二五	
一二六	
一二七	
一二八	

四一	旧土人就学児童調ニ干スル件
四二	実業補習学校専任教員補助ノ件
四三	教員辞令ニ干スル件
四四	実業補習学校調査ノ件
四五	教員辞令ニ干スル件
四六	職員居所通知ノ件
四七	教室温度表
四八	事務引継報告書　上浦幌小学校長
四九	教員辞令ニ干スル件
五〇	第六回全国小学校女子教員大会開催ノ件
五一	教員健康診断施行ノ件
五二	実業補習学校在学者調査ノ件
五三	代議員会提出問題ノ件
五四	教員費等調査ノ件
五五	日本教育協会ニ干スル件
五六	李王殿下國葬ノ件
五七	小学校会並同令施行規則改正ニ干スル件
五八	学校給食ニ干スル件
五九	出張命令省署ノ件
六〇	学務委員当選通知
六一	夏季講習会ニ干スル件
六二	学校生徒トラホーム患者調査ノ件

六三	市町村立小学校教員数其他調査ノ件
六四	大正十五年度実業教育講習會改題ノ件
六五	学校林面積照會ノ件
六六	地久節ニ付休校ニ干スル件
六七	学齢児童就学成績表ノ件
六八	大正十五年度國庫下渡金ニ干スル件
六九	運動奨励並指導ニ干スル件
七〇	御真影拝戴ニ干スル件
七一	女教員産前産後休養ニ干スル件
七二	旧土人児童其他ニ干スル調査ノ件
七三	実業補習学校ニ干スル件
七四	教員宿所ニ干スル件
七五	小学校教員研究会開催ニ干スル件
七六	教員養成講習会ノ件
七七	体育講習会ノ件
七八	市町村立小学校教員住宅等状況調査ノ件
七九	一年現行小学校教員俸給國庫負擔金交付ノ件
八〇	小学校教員及幼稚園保姆検定試験施行ニ干スル件
八一	民有地土地調査ニ關スル件
八二	二部教授実施ニ干スル件
八三	特別町村調査ニ干スル件
八四	教員居住通知ノ件

目録

番號	件名
一	授業開始ニ關スル件
二	市町村義務教育費国庫負担法第三条後段依ル大正十四年度交付金交ノ件付
三	育英事業ニ關スル調査ノ件
四	講習会出席旅費ニ關スル件
五	小学校教員検定願添付履歴書ノ件
六	教育参考資料ノ件
七	神ながらの道送付ニ關スル件
八	私事旅行願提出ノ件
九	学務委員会開催ニ關スル件
一〇	水産講習会ニ干スル件
一一	御真影拝戴ニ干スル件
一二	教員養成講習会ニ關スル件
一三	貯金増減ニ關スル件
一四	十勝青年学校ニ關スル件
一五	十勝農業学校生徒募集ノ件
一六	桃山報徳会書利用ニ關スル件
一七	廳立根室商業学校生徒募集ノ件
一八	特別旅費支出ニ干スル件
一九	小学校通学区域図ノ件
二〇	小学校科目等ニ干スル件
二一	管内小学校長会議開催ノ件
二二	大谷高女生徒募集ニ干スル件
二三	旭川商業学校生徒募集ノ件
二四	特別教育課程ニ依ル尋常学校及特別教授場経費補助ノ件
二五	全國小学校長開催ノ件
二六	優良児童表彰ニ關スル件
二七	旧土人児童就学調査ノ件
二八	汽車通学取締ニ干スル件
二九	卒業証書授與式挙行ノ件
三〇	特別学級ニスル件
三一	市町村義務教育費國庫負担法第五条ニ依ル大正十四年度特別町村交付ニ干スル件
三二	大正十四年度小学校教員住宅料補助ノ件
三三	教員住所ニ關スル件
三四	学校ニ於ケル歯科医ニ干スル件
三五	小学校教員試験検定ニ干スル件
三六	実業読本購ニ干スル件
三七	徴兵署視察ニ干スル件
三八	疱瘡豫防ニ干スル注意ノ件
三九	學事工程報告
四〇	歴署略説配布ノ件

浦幌町立博物館紀要　第16号　2016年3月

資料紹介

大正十五年 昭和元年 教育雑件

浦幌村役場

三浦直春 解読

本報は、浦幌町立博物館所蔵の「大正十五年　昭和元年　教育雑件」（浦幌村役場）簿冊に綴られた各文書を翻刻したものである（図1）。各文書の内容については、冒頭に目録が綴られており、本号に掲載してある。

各文書については、今後発行する紀要に文書毎に分割して掲載する。なお、掲載の順序は、原則として「教育雑件」に綴られている順序とする。

翻刻は、浦幌町立博物館ボランティアの三浦直春が担当した。

※原資料は浦幌町立博物館で収蔵していますが、資料の劣化防止などのため、展示公開はしていません。調査・研究上の理由で必要な場合には、所定の手続きにより閲覧する事が可能です。原資料の閲覧が必要な場合は、博物館までお問合せ下さい。

〔浦幌町立博物館学芸員〕

図1　大正十五年　昭和元年　教育雑件（浦幌村役場）

投稿要領・執筆要領

浦幌町立博物館では、『浦幌町立博物館紀要』への投稿者を募っています。投稿範囲は、浦幌・十勝並びに北海道を含む北方圏に関する論文、短報、資料紹介、新産地情報、調査・観察記録などです。

投稿は随時受け付けておりますので、投稿希望の方は、当館へご連絡下さい。

投稿者への別刷りは、50 部までは無料です。それ以上の印刷については著者負担とします。

なお、投稿原稿は紀要に掲載後、インターネット上で全文を公開します。投稿にあたっては、電子公開に関する同意を前提とさせて頂きます。

執筆にあたっては、以下の投稿要領・執筆要領を参照の上、原稿を作成ください。

1　投稿要領

＜提出方法＞

原稿は手書きまたはパソコンで受け付けます。投稿の際は、別紙に氏名・タイトル・連絡先を明記して下さい。

手書き原稿の場合は、縦書き・横書きのいずれも 400 字詰め原稿用紙を使用して下さい。

パソコン原稿の場合は、テキスト形式もしくは MS-Word 形式で保存したデータを、打ち出し原稿と共にお送り下さい。

データでの提出は、USB メモリもしくは CD-R で送付下さい。電子メールでの提出にあたっては、投稿用のメールアドレスを別途指示しますので、事前にご連絡ください（博物館の代表アドレスでは受け取れませんのでご注意ください。）

原稿は「紀要原稿在中」と赤書きの上、下記の浦幌町立博物館宛に提出ください。

〒 089-5614
北海道十勝郡浦幌町字桜町 16-1　浦幌町立博物館
電話：015-576-2009

2　執筆要領

＜言語＞

本文は和文に限ります。ただし、タイトル、氏名、所属には英語表記を御用意ください。また、英文アブストラクトを付ける事もできます。

学名、欧文用語および数字は半角文字で記し、句読点はそれぞれテン全角（、）および全角マル（。）とします。

＜引用文献＞

文献は、原則として本文中に引用した文献のみをとりあげ、和文、欧文を含めて著者名のアルファベット順に配列して下さい。

本文中での引用は（持田・加藤 2001a; 持田 2002）、持田ほか（2001）、(Mochida & Kato 1995, 2001b, c)、Mochida et al. (1997) を原則とします。なお、縦書きの場合は、原則として漢数字で表記下さい。

（例）持田誠（二〇一五a）

下記の表記例を参考にして下さい。

a．論文の場合は、著者名．発行年．表題．掲載雑誌名巻（号）：ページ．と表記する。

（例）上赤博文．1995．田手川の植物群落と植物相．佐賀自然史研究1(1)：5-16.

b．単行本の場合は、著者名．発行年．書名．ページ数．発行所，発行地．と表記する。

（例）伊藤秀三．1994．島の植物誌．246pp．講談社，東京.

c．単行本（分担執筆）の一部を引用する場合は，著者名．発行年．章名．本の編者名，書名．章のページ．発行所，発行地．とする。

（例）長田芳和．1997．ニッポンバラタナゴ．長田芳和・細谷和海（編），日本の希少淡水魚の現状と系統保存―よみがえれ日本産淡水魚―．pp.76-85. 緑書房，東京.

＜脚注＞

脚注は本文末にまとめて記述します。表記は（註 1）の形式とします。本文中では下記のとおり表記して下さい。

（例）・・・と考えられている（註 1 ）。

＜図表と説明文＞

図表番号は写真も含めて図 1、表 1 とします。

図版、写真、表は、本文へ貼り付けず、1 点ずつ別途お送り下さい。また、図版データは JPG で、表データはエクセルの形式で提出願います。

図は図表、図版とも完全原稿とし、余白または裏に著者名，番号，天地を明記して下さい。また、本文の打ち出し原稿の右余白に図の挿入位置を書き込んで下さい。ただし図版の説明文（キャプション）は図版にはめこまず、

図表番号と説明文を別紙 A4 用紙に記入して下さい。図表の説明文には英文を併記することができます。

（2016 年 3 月制定）

浦幌町立博物館紀要　第16号

発　行　日　　2016年3月31日

編集・発行　　浦幌町立博物館
〒089-5614　北海道十勝郡浦幌町字桜町16番地１
電話　015-576-2009　　FAX. 015-576-2452

印　刷　所　　大同出版紙業株式会社
〒080-0017　北海道帯広市西７条南６丁目２番地
電話　0155-23-5107　　FAX. 0155-23-9032